



UNIC Tokyo Dateline UN

January / February 2003 Vol.38

国際連合広報センター

2003年は 国際淡水年



水のろ過方法を習う農村の女性たち（アフリカで）

「開発途上地域で病気を減らし、人命を救う最善の策は、すべての人々に安全な水と十分な衛生設備を届けることをおいてほかにない」

コフィー・アン
国連事務総長
(ミレニアム報告書より)

国連総会は地球の将来にとっての水の中心的な重要性を認識し、2003年を「国際淡水年」と宣言しました。

淡水は地球上の生命にとって、もっとも貴重な要素です。それは人間の基本的ニーズ充足、健康、食糧生産、エネルギー、および、地域と世界の生態系の維持に欠かせません。地球の表面の70%は水で覆われていますが、淡水はそのわずか2.5%に過ぎず、しかもその70%が氷冠として凍結されています。その残りが地中の水分として存在します。つまり、世界の淡水資源のうち、人間が利用できるのは1%に満たないのです。

国際淡水年は、人間の基本的ニーズを充足し、水を持続可能な形で管理するために、認識を高め、優良な実践を促進し、人々に働きかけ、資源を動員する機会を国際社会に提供します（2-3ページに続く）。

INSIDE

2003年は国際淡水年	2-3
アン国連事務総長、米国ウィリアム・アンド・メアリー大学における記念講演（抜粋）	4-5
イラクをめぐる国連安保理の動き	6-7
国連イラク査察団バグダッド報道官 植木安弘氏による寄稿	7
アン国連事務総長、新年の記者会見での発言（全文）	8-9
「ケニアの農村で見つけた宝物」 UNIC元インターによる体験記	10-11

<http://www.unic.or.jp>

2003年の国際年は？

International Year 2003

国際淡水年

国際社会が1年間を通じて共通した問題に取り組む「国際年」は、1957年の「国際地球観測年」が最初です。国際年の制定は通常、国連総会の場で決定され、各国政府は官民合同の国内委員会を設置し、行動計画を作成するよう要請されます。

地球社会が抱える大きな問題について「相互依存」の精神に基づいて考え、それぞれの地域で行動を起こすことこそ、国際年の趣旨といえます。



水は今、どうなっているのか？

*世界人口のおよそ6分の1に当たる11億人が安全な水を利用できず、また、十分な衛生サービスを受けられない人々も24億人と、世界人口の40%に達しています。

*毎日、約6,000人の子どもたちが、安全でない水や劣悪な衛生状態に関連する病気で命を失っていますが、これは1日20機のジャンボ・ジェットの墜落事故に相当します。

*安全でない水と衛生設備は、開発途上地域における病気全体の80%の原因になっていると見られます。

*女性と少女は、衛生設備の不足からもっとも大きな被害を受ける傾向にあります。

*先進国のトイレを1回流すだけで、開発途上地域の平均的な人が1日に洗濯、飲み水、掃除および料理に使うのと同じ量の水が使われます。

*20世紀には、水の使用量が人口の2倍の速さで増えました。中東、北アフリカおよび南アジアは慢性的な水不足に悩まされています。

*開発途上国では、未処理で排出される下水が全体の90%に上っています。

*飲料水と灌漑を目的とした地下水の過剰な汲み上げにより、多くの地域では地下水位が数十メートルも低下し、人々が質の悪い水を飲み水に利用せざるを得なくなっています。

*開発途上国では、漏水、不法な引水および浪費による水の損失が飲料水の50%、灌漑用水の60%にも及んでいます。

*洪水による被害は、1990年代の自然災害被害者全体の75%に広がり、自然災害被害額推計の33%以上を占めています。



「水は恐らく、農業と工業の発展から、社会に根ざす文化的・宗教的価値観に至るまで、人間の文明の全侧面に影響する唯一の天然資源であろう」

－松浦晃一郎ユネスコ事務局長



「国際淡水年」に関する情報は <http://www.wateryear2003.org> でみることができます。また、3月16日～23日に京都、大阪、滋賀の3府県で開催が予定されている「第3回世界水フォーラム」には国連機関、各国閣僚、NGO らが参加し、世界各地で起きている「水問題」に取り組みます。「第3回世界水フォーラム」の情報は <http://www.worldwaterforum.org/jpn/index.html> をご覧ください。



「世界の貧困層の惨状は、これらの人々が依存する資源基盤、すなわち土地と水資源の質的改善に取り組まなければ軽減できない。水利用の改善は、持続可能な開発のその他あらゆる側面にとって中心的な存在である」



－持続可能な開発に関する世界サミット
ニティン・デサイ事務局長

水は今、どうなっているのか？

行動に拍車をかけ、前進を導くため、いくつかの強力な目標が定められています。世界の指導者たちは国連ミレニアム・サミットで、安全な飲料水を利用できない人々の割合を2015年までに半減させることで合意しました。そして2002年のヨハネスブルク・サミットでは、この公約を再確認し、同年までに基本的な衛生設備を利用できない人々の割合も半減させるという、これと対を成す目標を加えました。指導者たちはまた、2005年までに、国内水管理・効率化計画を策定することにも合意しました。

これらの目標達成は大きな試練であり、莫大な資源、および、政府だけではなく、水を利用する人々や、特に国内レベルでこの貴重な資源に投資する人々の協調的な行動をも必要とします。具体的には、次のような行動が必要です。

*水利用と衛生に関わる行動を変革する。

*女性団体をはじめとするコミュニティの活力と参加を動員する。

*投資を生み出すための国内的な目標と計画を定める。

*公衆衛生と生態系のニーズとともに考慮する水管理のための政策と規制枠組みを実施に移す。

*民間企業、二国間ドナー、開発機関、銀行、市民社会および地域社会の間のパートナーシップを形成する。

勇気づけられる知らせがあります。ヨハネスブルクでは、20件を超える水と衛生のパートナーシップ構想（資金総額10億ドル以上）が政府、国際機関・銀行、非政府組織および民間パートナーによって発表されました。私たちは今、この勢いを保ち、目標の達成と、水資源の最善活用に努めなければなりません。

コフィー・アナン国連事務総長

武力の行使に訴えるより先に、

国連には平和的な解決のあらゆる可能性を探る義務がある

"United Nations has duty to exhaust all possibilities of peaceful settlement before resorting to use of force."

以下は2月8日、米国バージニア州ウィリアムズバーグのウィリアム・アンド・メアリー大学において、コフィー・アナン国連事務総長が同大学の創設310周年を記念して行った講演内容（抜粋）です。

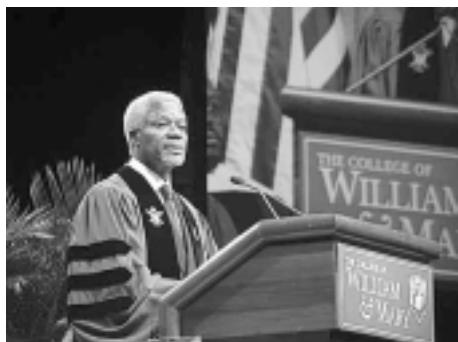
今日、人類という一つの家族は不安な時期を迎えています。中東での暴力の激化、核の拡散、そして新たなテロ攻撃に対する深い憂慮が広がっています。そしてもちろん、ここ米国にも、世界全体にも、イラクでの戦争の危険に対する極めて大きな懸念があります。

この危険を回避するために、国連は何をしているのかと疑問に思う方々も多いことでしょう。

そもそも国連が創設されたのは、「戦争の惨害から将来の世代を救う」ためではなかったのか、と。

それはそのとおりです。国連の創設者たちは、2度の世界戦争を経験しました。ですから、戦争がもたらす恐ろしい荒廃と惨禍を痛感し、世界が再び、このような苦悩を経験しないようにすることを決意したのです。

私たちはこのビジョンを失ってはなりません。戦争は常に人災なのです。その他すべての可能性が費え、かつ、これに代わり得る策がさらに悪い結果をもたらすことが明らかなる場合にはじめて、武力の行使を考え



るべきです。イラクで再び戦禍が起きれば、イラクの人々、そして恐らくその近隣諸国の人々も、大きな被害と苦痛に見舞われかねません。私たちはすべて、そして何よりもイラクの指導者自身が、できる限りこの事態を防がなければなりません。

しかし、国連の創設者たちは平和主義者ではありませんでした。力に對して力を用いなければならない時があることを知っていました。国連憲章に強力な強制措置規定が組み込まれ、国際社会が侵略に対して団結し、これを打ち破ることができるようになっているのも、このためです。

12年前、イラクがクウェートを侵攻した際に、国連はまさにこれを実行に移しました。安全保障理事会はまず、侵略者に対し、平和的な撤退という明白な代替案を示しました。そして、これが拒否されたとき、安保理は武力の行使を容認したのです。

それは厳しい選択でしたが、必要

な選択でもありました。安全保障理事会はその責任から逃げませんでした。その権限により、国連のリーダーシップの下、幅広い多国籍軍が忍耐強く形成されました。クウェートを救うために軍隊を派遣した22カ国のうち、少なくとも11カ国がイスラム教国でした。この教訓は今日もしっかりと生きています。

残念ながら、イラクは1991年に停戦協定の条件に従って受け入れた義務をすべて全うしていません。特に、安全保障理事会は、大量破壊兵器の全面的な廃棄を確認できていません。

これはただ一国の問題ではなく、国際社会全体の問題です。各国が自衛のためではなく、国際の平和と安全に対する脅威に幅広く対処するためには、武力を行使する決定を下す場合、これを正当化できるのは、国連の安全保障理事会において他にありません。世界中の諸国および諸民族は、このような正当性、そして国際的な法による支配を根本的に重視しているのです。

このような幅広い脅威の明らかな一例が、大量破壊兵器のもたらす恐怖です。イラクに限らず、この問題は最大の重大性を備えており、国際社会はその安全の基盤を極めて慎重に再考することを迫られています。

この再考は統一された形で行うことが極めて重要です。そうすることにより、軍縮と不拡散に関する多国間条約を損なうことなく、逆にこれらを強化する形で、より大きな安全を確保すべきです。集団的かつ多国間のアプローチのみが、大量破壊兵器の拡散を実効的に防止し、世界をより安全な場所とすることができます。

もちろん、この目標を根底から搖るがすのは、大量破壊兵器を実際に使用することであることに変わりはありません。したがって、私はすべての当事者に対し、イラクであろうとなかろうと、そのような兵器を使用しないことを誓うよう、厳粛に警告しなければなりません。その使用を命じたり、これに加担したりする者は、もっとも大きな責任を負うことになるでしょう。

それでも、このような心配が取り越し苦労であることを期待しましょう。私たち国連には、武力の行使に訴えるより先に、平和的な解決のあらゆる可能性を探る義務があるのです。

3カ月ほど前、安全保障理事会は決議1441を採択し、イラクで活動する国連兵器査察官に新しい、さらに強力な権限を与えました。この決議は慎重で粘り強い交渉によって生まれたもので、その結果、全会一致で採択されました。このことが決議の一層の権威を与えています。それは法、集団的努力、および、国連独自の正当性に裏打ちされた権威です。これこそが、平和と安全に資する多国間外交の真髄なのです。

この決議が与える権限のもと、国連査察官は4年ぶりにイラクに戻りました。1990年代前半の経験からも分かることおり、査察は実際に機能し

うのです。国連査察官はその間に、爆撃によって破壊されたものよりもはるかに多くの兵器と施設を廃棄しました。

今日、査察官が再びイラクで活動できるのは、ブッシュ大統領の断固とした姿勢、および、そこから生まれる強い圧力に負うところが大きいのです。

安保理は決議1441で、イラクのこれ以上の重大な義務違反、あるいは、イラクによる査察活動の何らかの妨害が報告された場合、直ちに理事会を開くことを決定しました。安保理はまた、この関連において、その義務に引き続き違反した場合に深刻な結果に直面するであろうとの警告をイラクに繰り返し行ってきたことも想起しました。

したがって、イラクがこの最後のチャンスを活かさず、反抗的な態度をとりつづけるならば、安保理は査察官の調査結果に基づいて、再び厳しい選択をせざるを得なくなります。この選択は1990年のものに比べ、より複雑、そして恐らくより決定的なものとなるでしょう。その時、安保理はその責任を全うしなければならないのです。

外交の成功とは、自らの支持基盤を最大限に広げることです。現状では、それは特に平和と安全の分野において、安全保障理事会の権威を強め、世界秩序をしっかりと守ることを意味します。

このことは重要です。なぜなら、イラクでの出来事は真空地帯での出来事ではないからです。それは良くも悪くも、米国、そして世界全体にとって極めて重要な他の問題に影響を与えます。例えば、私たちが国際

テロとの闘いを繰り広げる環境は、大きな影響を受けることになるでしょう。

私たちはすべて、国連が自らの課題を他者に押し付けようとする別個の主体でも外部の主体でもないことを理解する必要があります。国連は私たち、つまり皆様と私自身なのです。このグローバル同盟を構成する191カ国にはすべて、なし得る貢献があります。その中でも、皆様の国、米国はもっとも強大であるだけではなく、1945年の国連創設においても、また、それ以降の国連の集団的行動においても指導的な役割を果たしてきたのです。

米国の強い指導力が、粘り強い外交的な説得と連合構築を通じて行使されれば、国連は成功を収められます。これは米国にとっても成功といえます。国連が結束し、不和ではなく、集団的行動の基盤として機能したとき、それは米国を含むあらゆる加盟国にとって、もっとも有用な存在となるのです。

私はここにお集まりのすべてのアメリカ人、特に、地域での長い奉仕活動の伝統を有するこの偉大な大学の学生である皆様に対し、このことを心に留めるようお願いしたいと思います。皆様の中には、進路の選択を控えている方々も多いことでしょう。皆様の多くが公務に就かれることだと思います。しかし、どのような職業を選択しようとも、私は皆様すべてが、公共に奉仕することを望んでいるものと期待しています。どうか、自国だけでなく、人類というすべての仲間たち、特に、他の大陸で貧しく慘めな生活を送りながら、欠乏と恐怖のない暮らしを待ち望んでいる人々の福祉のためにも貢献してください。

最近のイラク情勢

2002年

11月8日

国連安保理、決議1441を採択。イラクでの大量破壊兵器の査察再開を全会一致で承認。これを受け13日、イラクは査察団の受け入れを表明。

11月18日

国連兵器査察団の先遣隊、バグダッドに到着。27日には国連査察団が4年ぶりに活動を再開。

12月7日

イラクが大量兵器に関する申告書を国連に提出。

2003年

1月9日

ブリクスUNMOVIC委員長、エルバラダイIAEA事務局長がイラクの申告書を精査した結果を安保理に中間報告。イラクの申告書の不備を指摘しつつも、「現段階で兵器製造に関する証拠を発見するに至っていない」。

1月16日

国連査察官が空の化学兵器用弾頭を発見。

1月20日

安保理で国際テロ問題に関する外相級協議。

1月27日

ブリクスUNMOVIC委員長、エルバラダイIAEA事務局長がイラクの大量破壊兵器開発疑惑に関する査察活動の結果を安保理に報告。「査察におおむね協力しているが、情報提供や関係者への聴取をより積極的に認めるべきだ(ブリクス委員長)」。

1月28日

ブッシュ米国大統領による一般教書演説。

2月5日

パウエル米国国務長官、安保理外相級協議でイラクの大量破壊兵器開発に関する機密情報を公表。

2月14日

ブリクスUNMOVIC委員長、エルバラダイIAEA事務局長が安保理に追加報告。15カ国の外相らが意見交換を行い、フランスとロシア、ドイツ、中国など大半の国が査察継続を支持。



バグダッドから世界へ

イラクの大量破壊兵器問題を調査するため、国連査察団がバグダッド入りしてから3ヶ月余り。活動再開以来、緊迫した状況のもとで査察団の報道官を務める植木安弘氏が、当広報センターに手記(2月16日付)を寄せてきました。

国連安全保障理事会(安保理)が決議1441号を採択して、イラクに対し大量破壊兵器廃棄の「最後のチャンス」を与えた昨年11月8日の午後に、国連監視検査委員会(UNMOVIC)と国際原子力機関(IAEA)のバグダッド報道官に任命された。そしてその1週間後にはニューヨークを発ち、同月18日にUNMOVICのブリクス委員長やIAEAのエルバラダイ事務局長等とバグダッド入りした。

以来ちょうど3ヶ月が経った。今、戦争になるかならないかの瀬戸際にいる超大国米国と地域大国のイラクが直接対決し、大規模な戦争になった場合には、国際政治的にも中東地域にも大きな地殻変動が起きる可能性がある。そのように緊張した状況の中で、その一言一句が各国のメディアに大きく報道され、各の政策判断の材料として使われる国連イラク査察団のバグダッドでの唯一の報道官として仕事をしている。

国連イラク査察団の情報源にはニューヨークとウィーン、そしてバグダッドの3ヵ所がある。査察に関する政策の統合的分析、安保理への報告書作りなどはニューヨークのUNMOVIC本部とウィーンのIAEA本部で行われているが、査察活動そのものはイラクで行われているため、日々の査察活動の発表などはバグダッドで行っている。また、ブリクス委員長とエルバラダイ事務局長のバグダッド訪問が3度あった。特に1月と2月の訪問は、軍事行使が必要になるかどうかの判断の材料となる安保理への報告前のハイレベル協議ということもあり、各国メディアの高い関心を集めた。

このバグダッドで公式に発言できる唯一の報道官であるため、これまでに何度も私の名前入りで発表しているプレス声明や記者会見での発言、テレビ、ラジオ・インタビューや問い合わせに対する回答が報道されている。

私の仕事で大事なことに、日々のプレス声明作りがある。その日の査察活動や個別の私的な聞き取り調査等に関する活動を簡潔にまとめ、プレスや国連を通じて世界に情報発信するのである。このプレス声明は私の名前入りで出しているため、私個人の声明と読み取られかねないが、実際には、化学兵器、生物兵器、長距離ミサイル、IAEAの各

チーム、そして各分野の専門家を含んだ2つの合同チームの主任査察官と密接に協議して作成している。できるだけ簡潔に事実を列記したものにしているが、それでもこのプレス声明が注目を浴びることが時々ある。

例えば、昨年12月27日のプレス声明で、IAEAが行った2度目のイラク国営企業の冶金学者からの聞き取り調査に関し、主任査察官が起草した表現を入れたところ、この冶金学者やイラク側から事実に則したものではないとして猛反発を食らった。あたかもこの学者が極秘核開発に関連のありうる軍事計画の詳細を暴露したかにも読める表現であったためだ。主任査察官に私自身もより詳しい説明を求め、その結果、不明確な表現についてはより正確な説明をした方がよいと提言し、翌日の記者会見でこの説明を発表した。既に世界のプレスはこの問題を大きく報道しており、私の記者会見も大きく取り上げられることとなった。CNNの国際版では私の顔が一日中映っていたようである。

2003年1月16日のプレス声明も話題になった。化学兵器弾頭が12個発見されたのである。11個は空であったが、12個目は空では無かった。これらの弾頭はイラクが提出した申告書には詳しく記載されていなかったため、大量破壊兵器の発見として報道され、ブッシュ大統領まで着目することになった。これらの弾頭は新たなものではなく、イラクが1988年に輸入したものだったが、イラクは既に申告したとの一点張り。ブリクス委員長は1月27日の安保理への報告の中で、これらの弾頭は申告され、破壊されるべきものであったと説明した。

安理会が主戦派と反戦派とに分かれ、査察活動が継続するのか中断されるのかまだ不明だ。

米英はイラクが大量破壊兵器を隠し持っていると主張している。イラクはこれを全面的に否定している。このような中で、我々の査察検証活動がどのような結果をもたらすのか。歴史の重要な岐路で、これまでの知識と経験をフルに活用して全力投球している。

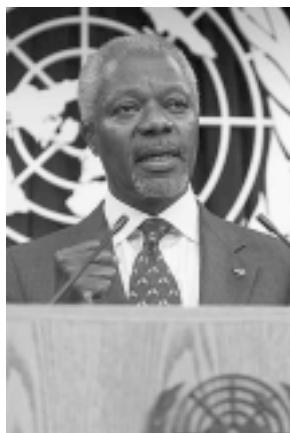
(国連イラク査察団バグダッド報道官 植木安弘)



コフィー・アナン国連事務総長

脅威の時代ではなく、新たな機会に富む時代ととらえたい

ニューヨーク、2003年1月14日



以下は新年の記者会見でコフィー・アナン国連事務総長が行った発言内容です。

私たちは不安とともに新しい年を迎えるました。それは、イラクでの戦争の兆し、朝鮮半島での核拡散、そして、中東での際限のない暴力の応酬に対する不安です。アフリカでもっとも安定し、繁栄した国の一つであったコートジボワールでさえも、今では紛争の深みにはまろうとしています。

グローバル・テロの脅威は消え去っていません。次の事件はいつどこで起きるのか誰にもわかりません。

しかも、これらは見出しを飾っている危機にすぎないのです。

全世界で蔓延するエイズは今年、イラクで戦争が起こった場合よりもさらに多くの命を奪い、その数は2004年、2005年と進むにつれて、さらに多くなるでしょう。南部アフリカや「アフリカの角」(アフリカ北東

部)」では今年、3,000万人の人々が餓死の脅威にさらされています。そして、貧困のため、母と子は至る所で早死にし、空腹のまま床につき、清潔な飲み水を利用できず、学校にも通えないままになっています。

他方、気候変動はすでに現実のものとなっています。暴風雨、洪水および干ばつがこれほどまでに増え、ますます多くの人道的な緊急事態や悲劇がもたらされている一因もここにあります。

"Yes, the world is a messy place. But the instruments are there to deal with these problems, and foremost amongst them is the United Nations itself."

あまりにも長い時間を要したもの、ボスニアでの戦争は終結しました。コソボでは復興が始まり、東ティモールは独立し、シエラレオネの恐怖は収まり、エチオピアとエリトリアも戦争を止めました。

この先を見ても、キプロスの再統合、スーダンの内戦終結、そして、アフリカ初の世界戦争の異名をとったコンゴ民主共和国での戦争の收拾は、もう一步のところまで来ています。

諸国が協力すれば現状を変えることができます。法の支配を堅持する国々は実際、より公正な世界という理想に近づくことができるのです。

2003年を迎えるにあたっての希望の根拠はここにあります。

私は依然として、イラクでも、朝鮮半島でも、さらにはイスラエルとパレスチナの間でさえも、各国が忍耐と決意を持ち、これらすべての問題について協力するならば、和平は可能であると確信しています。

それでも、私は事を楽観しつづけています。

今日の脅威は、私たちが遭遇する初めての脅威ではありません。しかも、この10年、私たちはこれらの脅威へのよりよい対処方法を学んできたと思います。

そして私は、国連加盟国191カ国が力を合わせ、テロリストに隠れ家を拒み、その資金源を絶つならば、テロでさえも打ち負かすことができる信じています。

皆様からのご質問をお受けする前に、現在、私にとって特に懸案となっているさらに2つの問題に触れたい

と思います。

アフリカにおける飢饉の脅威についてはすでにお話ししました。皆様もご存知のとおり、これはアフリカの南部において特に深刻です。問題の中心となっているのがジンバブエの危機です。ジンバブエはかつてアフリカ南部の穀倉地帯でしたが、今では飢餓とHIV／エイズによって壊滅的な打撃を受けています。この悲劇的な状況は、自然の力だけでなく、管理の不行き届きによっても引き起こされています。そのどちらが大きな原因かを議論すればきりがないでしょう。しかし、現在の課題は、すべてのジンバブエ国民がともに一丸となり、かつ国際社会とも協力して、手遅れになる前に解決策を見出すことです。

もう一つの問題はベネズエラです。過去20年間、ラテンアメリカは民主主義を標榜し、独裁的な政府形態に背を向けてきました。ベネズエラに変化をもたらそうとしている人々がこの成果を尊重し、人権と正義の原則に沿って民主的かつ合憲的手段以外には訴えないよう私は期待します。

最後に、今を脅威の時代ではなく、新たな機会に富む時代と捉えるべきだということを申し上げたいと思います。私たちが真剣に努力し、かつ、指導者たちに当地でのミレニアムサミットで自らが行った約束を守らせることができるならば、私たちは貧困を打ち破る最初の世代となるのです。

確かに、世界は混乱に満ちた場所です。しかし、問題に対処するための手段はあります。その中でもっとも重要な位置を占めているのが国連です。

2003年国連職員採用競争試験、実施される

2003年国連職員採用競争試験（P-2 レベル）が外務省と（財）津田塾会の協力を得て、2月4日、5日の両日、東京の津田国際研修センターで行われました。競争試験は世界の33の都市で約4,000人の受験者を対象に行われ、東京の会場では46人が受験しました。

初日は、統計（受験者1名）、経済（18名）、法律（12名）、科学技術（8名）、財政（3名）、情報処理（3名）、看護学（1名）、図書館学（0名）の8つの専門分野における筆記試験が行われました。

2日目は、一般教養問題の試験（いずれも出題は英語または仏語）が実施され、午後6時から10時までの4時間におよぶ試験時間にもかかわらず、熱心に取り組む受験者の姿が見られました（写真右）。



この難関を突破した合格者が、今年後半に予定される口述試験に進み、さらにそれに合格した若干名が正規職員として採用されることになります。

国際機関の職員採用については職員の国別構成に偏向のないよう、地理的配分を考慮して採用する原則があります。現在、国連で働く専門職員以上の人数は約2,400人（そのうち女性は約1,000人）。日本の場合、望ましい職員数は約300人といわれていますが、現在の日本人職員数は約100人（うち女性は約60人）と3割に過ぎません。

こうした格差をなくすために行われているのが国連職員採用競争試験です。この国連職員採用競争試験に多くの日本人が応募し、一人でも多くの日本人が正規職員として採用されることが望まれています。

ちなみに、2001年度（2000年2月に実施）の結果は最近発表され、63人の受験者に対し最終的に5人が合格しています。また選考にも時間がかかるており、2000年度（1999年2月に実施）の合格者の1人は、昨年11月にニューヨークの国連本部に着任したという状況です。

国連職員採用競争試験の応募要綱などの概要は、国連のホームページ（下記）でご覧いただけます。また2003年の審査状況・試験結果、並びに2004年の国連職員採用競争試験（応募締め切り：2003年9月予定）についても、近いうちに国連のホームページに掲載される予定です。

<http://www.un.org/Depts/OHRM/examin/exam.htm>

国際協力を仕事として ～ケニアの農村で見つけた宝物～

国連広報センター（United Nations Information Centre = UNIC）では、大学生・大学院生をはじめ、さまざまな経歴を持つインターの方々に日常業務をお手伝いいただいている。かつて UNIC でインターを務めた後、青年海外協力隊としてケニアの農村地帯に赴き、理数科教師として活動した宇都宮マツヨさんの体験記をお伝えします。宇都宮さんは昨年 12 月に任期を終えて帰国しました。

2000 年 12 月から約 2 年間、私はケニアの首都ナイロビの南西部に位置するマクエニ県キルング地区のセント・ルシア女子高等学校（St.Lucia girls high school）で、クラス担任をしながら数学と生物を教えました。山奥にある田舎の小さな学校だったので、全校生徒は 100 人足らず、教師は私を含めて 10 名でした。

ケニアの学制は 8・4 制で、初等教育（Primary = 日本の小中学校に相当）に 8 年、高等教育（Secondary = 高校に相当）に 4 年となっており、初等教育のみが義務教育です。大学は日本と同じ 4 年間です。

教える内容は日本の高校レベルとほとんど変わりないので、計算力の弱さ、基礎学力の低さが深刻な問題でした。例えば、コンパスの使い方が分からず、分度器の使い方が分からず、角度が読めず、三角形が書けず、割り算ができないといった例があげられます。

その理由として、さまざまな原因があります。まずは、家が貧しいのでコンパスや分度器が買えず、授業では理論だけ聞いて実際やってみることができなかつたということ。または、小学校の先生が教える内容を飛ばしたかもしれないということ、あるいは授業料が払えないため、生徒がその授業を休んでいたことも考えられます。

ケニアでは、授業料を払えない生徒は学校に来ることができません。校長は学校経営に必要な授業料を集めなければならないため、生徒にお金を取りに帰らせてています。お金の工面ができない生徒は、そのまま退学になってしまいます。ほとんどの生徒の家は農家で、雨季に雨がきちんと降るか降らないかで、生徒の将来が決まってしまいます。雨が降れば、農作物がたくさんできて授業料を払えますが、雨が降らなければ不作になり、多くの生徒が学校に通えなくなります。例えば、セカンダリーの 3 年生はたった 6 名ですが、彼女たちが 1



【写真上】近所の子どもたちと。小1の少女ムエンデ（右端）は、宇都宮さんに「ダンヌ」という名前をつけてくれた。現地の部族語で「人を楽しませる」という意味を持つ



【写真上】セント・ルシア女子高等学校。
校舎の前にはグランドが広がっている

年生の時は 20 名いたそうです。つまり 14 名の生徒が途中で退学したことになります。

私は基本的な小学校の内容を一部の生徒たちに教えるながら、高校レベルの内容を教えていかなければいけなかつたので、授業以外にも休み時間や放課後、補習などをを利用してカバーしていました。また、学校は週休 2 日制でしたが、生徒は土曜日も朝から昼まで登校して自習をします。この自習時間も、進度が遅い授業を補うために利用しました。ちなみに土曜日も出席はきちんと取られており、無断欠席すると校長先生から罰が与えられます。

ある時、計算力をつけさせようと、私が教える 2 年生の生徒全員に毎日 10 問の計算を朝の自習時間にさせました。そして全校生徒に「計算大会」と題して一齊に問題を解かせると、なんと平均点は 2 年生のほうがダントツに高かつたのです。2 年生は上級生よりも平均点が高かつたので、かなり喜んでいました。「努力は実る」と感じてもらえた体験で、懐かしい思い出となりました。



【写真左】授業は40分単位で行われる。チャイムはなく、係の生徒がベルを鳴らして授業の終わりを知らせる。時計は貴重品なので教室には掛けていない。屋外でとるランチ・メニューは毎日同じで、トウモロコシとマメをゆでた「ジゼリ」一品と決まっている



【写真上】クラス担任した生徒たちと一緒に。みんな私によくなついてくれた。ケニアの気候は、赤道直下でありながら意外なほど涼しく過ごしやすい。日本と違って四季ではなく、雨季と乾季の繰り返し。1年中で2~3月が暑く、7~8月が寒い。寒い時には部屋で炭を焚いて暖をとり、セーターとコートを着て学校に行った

私の任地はケニアの首都ナイロビから「マタツ」と呼ばれるミニバスに乗って2時間、そこから徒歩で1時間の山奥にあるキルング地区のカウティという場所で、学校の中にある教員住宅に暮していました。任地ではマタツが走っておらず、車を持っている人は村民全体の1パーセント以下で、近くのヌングニという町まで買い物に行くのにも大変不便でした。

水道、ガス、電気、電話がなく、水は学校の貯水タンクから雨水を、乾季になれば川水を利用しました。ガスの替わりにケロシンストーブや炭、電気の替わりにケロシンランプやろうそくを使いました。

ケニア料理といえば、主に「ジゼリ」と言うトウモロコシとマメをゆでた物や、「ウガリ」と言う味のないモチのようなもので、基本的に地元の人にとって肉は贅沢品で、めったに食べていませんでした。日本に帰国する際、近所の人から「牛をやるから日本に持って帰れ、鶏をやるから日本に持って帰れ」と真剣に言われました。銀行口座を持っていないこの人たちにとって、牛や鶏は大切な財産なのです。ちなみに、銀行は首都や大都

市にしかありません。

任地での治安は良かったのですが、首都ナイロビの治安はとても悪く、目の前で引ったくり事件を目撃したり、友人がバスの中でスリにあつたりしました。モンバサでホテルの爆破事件が起きたこともあり、日常生活ではかなり気をつけて行動を取っていました。

私は便利な首都よりも任地が大好きでした。澄みわたる青い空、山の緑、美しい景色、美味しい空気、かわいい子どもたち、そしてきれいな星空。私はあそこで任地の人たちと共に過ごした2年間を誇りに思います。決して忘ることはないでしょう。

国連ボランティア事務局長シャロン・ケイプリング・アラキジャ女史が2001年年次報告で、「ボランティアは与えるよりも多くのものを結果的に得るということができる」と述べていますが、私の経験に基づいても同様のことが言えます。決してお金では買えない、人生において貴重な宝物を得ることができたのです。

(国連広報センター元インター 宇都宮マツヨ)

危機にさらされている子どもたち

アフガニスタンの子どもたち
©UNICEF/HQ01-0513/Shehzad Moorani



東京・渋谷の UN ハウスの UN ギャラリーでは、2003 年 1 月 16 日（木）から 3 月 31 日（月）まで「危機にさらされている子どもたちユニセフパネル展一」を開催しています。

現在、1 年間に開発途上国で命を失う 5 歳未満の子どもの数は 1,100 万人以上。その死因の多くが肺炎や下痢、予防接種で防げる病気などです。1 億 4,900 万人の子どもは栄養不良の状態にあります。また、学校に行きたくても行けない子どもたちは 1 億人以上。10 歳～14 歳で働いている開発途上国の子どもは 1 億 9,000 万人にのぼります。搾取や虐待の犠牲になる子ども、紛争に巻き込まれる子ども…。苦しみの最前線には、子どもたちがいます。

2002 年 5 月に開催された「国連子ども特別総会」は、「子どもにふさわしい世界」と題した文書を採択して閉幕しました。子どもにふさわしい世界を築くために世界中のすべての人に求められたのは次のよ

うなことでした。…子どもを最優先に考えること、貧困をなくし、子どもに投資すること、すべての子どもをケアし、教育を受けられるようにし、紛争や搾取や害悪から守り、子どもの声を聞くこと、HIV／エイズと闘うこと、子どものためにこの地球を守ること…。

さまざまな側面から世界の子どもたちの現状を伝える UN ギャラリーの展示を通じて、子どもたちの存在を感じていただけるよう、皆さまのお越しをお待ちしています。

期間：～2003 年 3 月 31 日（月）まで
土日、祝祭日および国連の休日は休館

時間：午前 10 時～午後 5 時 30 分

場所：UN ギャラリー（UN ハウス 1、2 階）



発行：国際連合広報センター

〒150-0001 東京都渋谷区神宮前 5-53-70 UN ハウス 8 階

TEL: 03-5467-4451

FAX: 03-5467-4455

URL: <http://www.unic.or.jp> E-mail: unic@untokyo.jp